花術風流解

2 中

へ13
3905
2

門へ13
號3905
巻 2

娼婦教導 花街風俗解 巻之下

大眼子 撰
伊賀丸 補

昭和十六年一月十一日
尼野貴美氏
寄贈

三会の傳

三会とは、いまだ刹傑とはなるべき。
なるべき分のことは、必しなどなり。
ちからのことを、手あしらう仕方なるべし。
又ぜひとも女郎と。務負なるべく

ぶんぜうしゝ所くゝ多くあるもあり。そもそもいい
あるものなり。大分中くらいなりしかのもなとび
すつぶん繃頭なりでとけんく通ることのるれ
じ。そもそもいとのやうなる毛でつくめすくしい
ふることと。十ふ全盛するうちゝ半もなく。いつ
ぶとしんよ頭てゐるひだゝうくめるゐ。半ゝ乃繃
ゐるのゐつぶそうく。そのぶ紐くよ和めくゐるが
ぜぶとゐとまくゆんとまくいつうう。扨こゝ元月

うゝも別よ繃年ゆいつく。て繃のあるゐわ
くどそれど。ゐにゐめくよ和めくゐ繃
すうあつぶもなく。ゐわゐ元うくいつゝ半あうく
ぶ。けんゐを紐ゐめのゐうゐうそこゐ
めのくうふ。ゐうりくゐる繃紐さすゆう
ふ和ゐべく
人つゐゐ元乃まじゐやとゐうゐと。こゐゐより
こゐ元七人ゐ乃ゐ二年こゐん和繃くうふ

ちくらい。百人百色の気質あるべし。紙づり
色てかるる気いふ人千人ちがべし。年ぐるう
おまえの女房よなりこもしまくれまくふんぐる人
ふいて文句なまぐで。老人おのきまくげうる。
むちのむしらけさ。せりぐりのいろくれかん
様りつのあるぐと。男自まんのなめくり。金
ちら色の方千ふ。なくまくの知りれ他人ぐや。
姉さまおのさまくれぐ百おくまくる

ぐまをかんぐまく。そのくのあまりりんぐい
ちくく考へまくんぐ。
たまくるるちくんくまぐど。紙金ちりぐ人ふ添
せちこいそおくまくふちくぐ人きくく。
おらひくぐやあちくくまぐぶ。わくぐちくぐ
ちやくくくぐぐのやうふちくづひぐやく
な。おくくお生人さんをめくくぐやあちくう
ぐまくぐ。わくやくくまくあまくさんをちくふ

あてがもつる

「そりやなどこいつたこと一用やうてつさの
事じやうつく。さいかうひいもりじやきい
ごとど。ぢんどこいつてあり。そうらうおうさい
ゆうこと。かたちとんいへません。おきんてんとを
いやじやとおもひる女いなんがでもおりやで
ないらうか

「アイきいる。あさてくる間うんといつたの

仕うちぐつる。あんまりつさすだらうつさうつ
く。ゆつるいつちくいろいろこゆしこへ
こと八はあねこつの赤ちいが。大のきりうそ。ひとう
ぢんよなるこつの中へ。はあがもつてもかるしやあ。
きつのでもうるて今ぢりうておくのうりとくあうて
すこしだとうこぐるなゆうりておくぐさうう

「こうてきんこうつて。いつこつをゆこふどやん
ど。さあるおまへどやこうこ。ちくこ。ト云

「おまへいかきやくのうちへいつておこうやせん。
ぼんまか

「ゆうべ博つるふこそうをいさんだ。ちつこしもやくちやもがいてよろこさんす。かくよて呼でくれんゆうふ物をいそんよちちつしやへくくさまで暮てちつしつへ

「去のごろいどうつこをものじやちつんがよけくへいそかくをかさんよかつく。容々十二月全かつぞ

わつるよへおまへが

「それこるそんをおくるかまへじや

「わつをちつへ来つこいへこめつへがあつくこそ

「あつこうへこいつこをぬこ。ちらでとうくいつまいとおつへこと。はるおまへさんの年一ゞでうでふおつへふ

「ゆへ巳のもぐつ。さごめくまつこ寄うあつじやからうとつひおつこ。んのちちこんのやうふおつうこ。おまへこうこ。おいこごへありつそじやいつく

「そりやうは人者(くざ)累してかるうらうとうふてどや
いもりどうあいそんど。とあどいんつづまと
うるうものしやるアトちんきるんりちあどく
「そんな年(とし)いてどやと絡つて情(じ)がない
「そんどと足るんの雲(くも)いいとうでなけひべ
なうぬ
「なうやいうんちうんち年(とし)があつさう。新(あら)たう

「フンなんのうをいてかまのがおりうう
「はおうい居(ゐ)でもよう
おうそうじやなか
「夢(ゆめ)位(ぐら)おのやうふもどくとうかう姑(しう)
うう。おううつうつうつうつう文(ぶん)けうふ。
うう
「かうまつうおうう。和(わ)気(き)のうるものじや

なん〳〵

「わしやおまへのそばでいやまでも待まね

「そばでそれ目がさめるまで待まものの

「三アわしを森さしておかそうつもりナア

「わしやつとがそうよいせんくやせんど爲うう

いんごとさ繁ゲてあつさうでいん

ぐ〳〵うんまが多ひらさうさ

「つまでそばよあそこいつさう待でやつまさう

となるぬ〳〵

「もうもうあんてきもふかうふあるい。

もうあんまりさてふらくまる

けーうどんつうとチリくとちうえぐ〳〵

まだてうちうちまんくうちうなるぐ〳〵

「わしやそんな事ちうまものじやとうつそう

「そりやもんぢのかあじやてくやとそなるう

いえどもいんせんくのやうくいかしくう

うちうものでうる

「よくもうるさいものぢわるしの書賣じや
もつく。だまされてゐるソヲナすると思ふる
「わるいぢゐ〳〵せうとかうもせうと。あれこれで
きまるもつる
「そのとおりいもうとおまへのねぶんをまさぐ
らうもつる。ぢうぢかぐいおまへをあげておく
「いまわるくつてめぐいわるくどうとも
なくぬもつる。ぢやおのづからぶせい

なるし。らんでもうやうんをぬきまもつん
「りおまへの釈ぢゲヨを思へいまるとんうん
とつてあつて。そのおまへぶせうとおそぢや
けんどうまぢいまてうたのうじんとうぶんぢ
「ゆぐうをおやまぢやとあるへてう
「おとあつてつるのしてみる気ぢやヨ
「かくてかるのよ。今のぢうぬといつてうさぢ
うてかくナア

「ようやいま生れて孫ぐらいまでの
「おまへひとりのかぐらなんぞのやうふ
「うそで帰てあてもいまごろは男ふたりねて
ぐわいたいまでおまへで気がむしやくしやしてゐるう
ぐんもなるめ
「いまのうち気まくそうてあさいる。女房となる
くらもんなものじやなつてある
「けごろは分ぎまへもあるもしるい

「うそんなもなけまぐ。男へいるゆて
あへとゆる
「ゆくとをやうとがこんしてあつて
「おまへさんきんがうけまびなんまいつてい
「ふおまへがけやうんづひさものじや
くまくのかさまあぐべ。抜くまぐ
やうまあまへさなまび。おまくまぐあへあて
やうまあまへさなまび。おまくまぐあへあて
やうまあまへさなまび。おまくまぐあへあて

まぐろ、かつを、ぶり、さば、いわし、ぼら、
ぼうだら、いなだ、あのり、ほとのけ、ものじゃ、ものよ
ものの、ものもの、ものもの。そのほか、ものもの、
氣をつき。そのほかの掃除は、
人をやとひ、人足、人夫、人をあつめ、人をあつめて、人をさ

人足や身体あつさ、あつさのような
人をあつめ。まさ人足と、人をさ

そのほか、かつを、ぶり、さば、いわし、ぼら、
ぼうだら、いなだ、あのり、ほとのけ、ものじゃ、ものよ
ものの、ものもの。そのほかの掃除は、
人をやとひ、人足、人夫、人をあつめ、人をあつめて、人をさ
人足や身体あつさ、あつさのような
人をあつめ。まさ人足と、人をさ
しまつ。ものもの場合あつ。ものもの。ものもの通行ものもの
ものもの。ものもの。ものもの。ものもの。ものもの。ものもの
ものもの。ものもの。ものもの。ものもの。ものもの。ものもの

い。後分は後ろに物ひなどふ事をつるこ。
うぐこと所分のとは有ひとすりが秘事。
又ちうて例のぬうさが宮ちうたけ分ごとの
低い人形で一信丁ふりそなたべこさんしい
れ人をちうこうとの中ふ。りれて浦へせうこも
物事を。むくの品と浦まで。分ちうに
とうれず。何事も後ちうもわうちうふ
流て通ることのなとば。ふうさうず第ふ初ふ

と分はうと義をつる。人ふ姉はりうをぬ板
ちうべこ。人ふ者人ありうちうとれい。分のう
ちうと人ふまで何のかめこ生ちを。のくる
通ちぬ事りふを出事ちうのなれば。ちうて
出ちうえあうべき事ちうり
一・逆后を者ちう後
面義者ちうつて及べど。良第ちうて どの
ちうる事で。ちうく保ちうの事の者まべき

ものもいろいろのべ。ゑぶくみげたの工夫をもておくびてさきをうつ。ものもとこの身よりふのぞきもとなくゆをとり分をとりてさんりうれば。うんもいつまりすなれど。そもはなしこがるるこゝの方うゝ一色ゝ二種ゝ紙紙をいひけるものなるべ。色色も格格くゝ垂がよう。扱この鞠毛を西西よりうけくゝ居て。扱さゝうゝ伝ゝとなりゝ人伝ぐるうれゝふ無ようるゝ

面倒のゝ。そもをと紙をせうく迎ゝいゝ。そもてこゝ紙と義理紙をを鈔人もこゝ体ゝいゝ垂が。伝ゝハゝきゝ砂糖などの有ようをいゝて垂ゝ。ぐをゝ伝ゝと一いゝの羊を云おくぐのひゝゝの紙表なゝ。ものもいそのの鞠毛の形ゝゝゝいゝゝゝゝを矢面の伝ゝゝゝめゝゝれべ。たゝくおゝゝきもゝ。ゝゝゝ二山垂ゝ身の上をあゝく仕まゝくゝ。伝ぐいゝゝ毛のいて

寛嶺戯画

白梅今の
あさし戯画

まあ仕方とまあ言葉し。そんぐ変り汚れ
言葉を教えましいろんいろんぬ事ぬり

「うめぐおまんてさいてさ通う。義理のある訳と
じゃ訳し事方又訳がありそそち実のそく
さんいかげでもう和ぐてじゃ分ぎどそくさん
いろをゆしろ知ろんとあうぐ。そそと義
理のおやのかさんいろを意見して。すん
ぐんつぐかげなりりかさろく。そちぐ

ましろ事ろろろうろうろうろうろうぐや
ろんぐ。義理の弟さんぐろく船じゃさいい。
ろろぐがありろうふなぬ。どのやうす
まんこそのぐじゃいる
「いまぐろろまろり申び切ろうする浮気お
いろろすの私のそげさろあしぐさい。ぎぐぐん
そのろうる事。行ぐれでする分ぎ。
申びまろう入ぐろうするろうる事ぐ

おもく気がすむうつる

人中又はそとびいぶすしく
むく人をまぶくさのぶせ上げちぐろう

一

病脳を交ぐる法

初生ろ分いてぐ出ぐまを半てんぐ。
すくくそも温熱ある人と交ぐくれも。
ぐまくを待ぐいぐくる。ぐんれい。
まづ温熱ある人くまぐくる人。呼吸の息

つひこんを付。それの出ぐくさと我引の死
を交ぐるふすぐ。我出る息をもくくの
引息を交くすいかまるぐ。それそそる
ぐくの出ぐ息をぐくくぐ息ぐくくぐ
なる。もくくのぐいさくくぐ出る息し
合ぐべしまく

胡椒七ぐ　山椒七ぐ　赤小豆七ぐ
きまを紅絹のふくくる布くく。二布のくとる

強い汁をかくとれば湯熱の氣いつて及ぶ。
一切の左病までのぐるべし。
へうそと又脫繁をせぐるなり。
と毎日さらづくりとふり合やうよ
すべく。昆布や魚をまぜひたの色彩を
塩く。板をつくさるものなり。作者
よう。なるべく制裁しるるべ。
所を傷りんとして癖もあり。

昆布さらしこと

昆布軍出る法

昆布をつくるものは初んすぐさく手まる。
繁樹をそうさ。ちるさてそれ
うれる。何と四月のぐるべ
何しくとわる人は和やく面白ものく
て。ほくてぐり所とは師ものなんど。
面えんとなるものて。竹まで凝つく

まさとおもうまきとくうん。和く刑罰こうく
う服の手傷く這入うんぐう。命のきへぐ美い
点のなしひうれば。行年と南ふ出ぬぐまた
なり。さしぐそまの移つて年へ美点でもも
ようぐんこのわう作い時のりく切中ひうく。どのくうふ
をなくものうんぐ。あまうのぐ色すぐれい。蛇
ふあいがぐうう。まくとまぐくが焼く出て
きくあくものう。又ふいかぐんよ射命ふく

とけばありうふなくて行く刑罰こうく
ゐるなり。ものれがいうう仕くき指物の
と考えべくきくかうの美つ点を面きふ
でうくうふを脱いぐ和年を陽うし
かうものうう立合ふ。ものんぐ年をいくす面
白くくうくもくう千ぐ写くさうすべくあく
ふうくうしくくもう。又代まおをを吸
んぐ年くくくうふ後くくて行う。ものを拭

「まくらが。わるくやあるかえんのあるおくさへ
美がうまへやうそおりうるへ
「イヽへまへいやどーのいるあるかゞもんせうじや
あるくるなゞけ。今いはけつくまへあるがごも
んせうが多い。年のよるあるかいはるがごも
て美がうへ
「やつぢと年うりれりおきやくでつさまるゞう。
まへくいやくなるんぐ
「まくらが。わるくやあるかえんのあるおくさへ
美がうまへやうそおりうるへ
「イヽへまへいやどーのいるあるかゞもんせうじや
あるくるなゞけ。今いはけつくまへあるがごも
んせうが多い。年のよるあるかいはるがごも
て美がうへ
「やつぢと年うりれりおきやくでつさまるゞう。
まへくいやくなるんぐ
「ちくらが。わるくやあるかえんのあるおくさへ
美がうまへやうそおりうるへ
「イヽへまへいやどーのいるあるかゞもんせうじや
あるくるなゞけ。今いはけつくまへあるがごも
んせうが多い。年のよるあるかいはるがごも
て美がうへ
「やつぢと年うりれりおきやくでつさまるゞう。
まへくいやくなるんぐ
「ちくらが。わるくやあるかえんのあるおくさへ
美がうまへやうそおりうるへ
「イヽへまへいやどーのいるあるかゞもんせうじや
あるくるなゞけ。今いはけつくまへあるがごも
んせうが多い。年のよるあるかいはるがごも
て美がうへ
「やつぢと年うりれりおきやくでつさまるゞう。
まへくいやくなるんぐ
「ちくらが。わるくやあるかえんのあるおくさへ
美がうまへやうそおりうるへ
「イヽへまへいやどーのいるあるかゞもんせうじや
あるくるなゞけ。今いはけつくまへあるがごも
んせうが多い。年のよるあるかいはるがごも
て美がうへ
「やつぢと年うりれりおきやくでつさまるゞう。
まへくいやくなるんぐ
「ちくらが。わるくやあるかえんのあるおくさへ
美がうまへやうそおりうるへ
「イヽへまへいやどーのいるあるかゞもんせうじや
あるくるなゞけ。今いはけつくまへあるがごも
んせうが多い。年のよるあるかいはるがごも
て美がうへ
「やつぢと年うりれりおきやくでつさまるゞう。
まへくいやくなるんぐ
「ちくらが。わるくやあるかえんのあるおくさへ
美がうまへやうそおりうるへ
「イヽへまへいやどーのいるあるかゞもんせうじや
あるくるなゞけ。今いはけつくまへあるがごも
んせうが多い。年のよるあるかいはるがごも
て美がうへ
「やつぢと年うりれりおきやくでつさまるゞう。
まへくいやくなるんぐ
「ちくらが。わるくやあるかえんのあるおくさへ
美がうまへやうそおりうるへ
「イヽへまへいやどーのいるあるかゞもんせうじや
あるくるなゞけ。今いはけつくまへあるがごも
んせうが多い。年のよるあるかいはるがごも
て美がうへ
「やつぢと年うりれりおきやくでつさまるゞう。
まへくいやくなるんぐ
「ちくらが。わるくやあるかえんのあるおくさへ
美がうまへやうそおりうるへ
「イヽへまへいやどーのいるあるかゞもんせうじや
あるくるなゞけ。今いはけつくまへあるがごも
んせうが多い。年のよるあるかいはるがごも
て美がうへ
「やつぢと年うりれりおきやくでつさまるゞう。
まへくいやくなるんぐ

「そのうせごとをいつてもおうるあるまい。
うかうとうりどうりてうんと楽しむうち
「なんのとうりうそうう
「あつはまんさんのやかわいあるまい。どの女中
さんでもまつてどやさうへ出うんゲなうね
老人よ出る時
男女とかうそうに年がうる程欲とうくうる
このなれが色欲の石をうなうなうあるべし。

あるまじい年寄あるよ出るうれた。ずつぐんや
らしうぐつうりとおしうけ。うつうり信用し
て主人やうが秘書うり。あうしかぐつうり
おしうけて行公の年ゲお役ようう。年
まううたその四方いづまの女中をつやゲる
このうりさんで老人でなうれだあるふもて
うど。抱ううとうぬこのうれだ気あふれ
を待ううどつく面あ人代品このよするゲ

ようすをうかがつてきるまん
んとこへ。まつくらくらのそこたるものそ。たぐ室中の
そこをおろうすまうかうして和て来ごろうと
まつぐ。きりこ石佛のゆうふきうろうとし
ておろう。俳く拍子うくやう赤い氣でおてい
ねんせものうりそうぐあろうとけ分ゥ仏
ぐ来ゑなくく向うあやまろくござる紙。
うのまま魚なるかつくあるやうるどろくくふ

ゆうくくふくうる麻うを手をつく。付合てきく
なまぐまつぐんくけのうくたるものうう
「くくく美へおきやくいあうぐれて美ぐうい。ゑ。
おきやくのくもくいくんくつまくれね
「はくくくおくおくくへ足ぐまんてやあくと
くくさんよ。やうまてあくゑゆくやうくふ
「くつぐおまくくもくあくりぐててねぐう
ておくま

「サアとくごろの女中さんだ。おとーようを
いやごとやおうさまあまだ。わたーやさいぜん
もいつたうまへおうさまようさーようのお方
ゲ情ごうへ
「さぐあておうへおうさまうぐうりませうな
をうようんうまをあるのをゆうたうたうう
えうううみア
「いうたうのうみ。美のある美さまうたうう

さぞ一しうたのうしやあうウ
はやうまきまくホ外々うんくの
ううとゆくだし
多さ[illegible]一そくの外
伊勢物がたり源氏などを見うふ。たぐあうさ
乃うまとしむようふ多ー。さんがうよ
うたの姉さまうまつきい源うまを清ど
さうなぐうまへまのうんぐうまへうの花
れうのうなまだ。おのづうふ和ようなまと

[illegible]

[illegible]男のなまくを刎てとれのんへ。

いまぐ[illegible]の話を聞て小姫でさへ美服うで

[illegible]を出へべくれよくまろ

てかなを年うり。おもと天地[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]でさへ[illegible]れいなく。[illegible]ふを[illegible]を

[illegible]のさ十[illegible]分[illegible]。[illegible]の仕手の出て

来めとう年なく。[illegible]の[illegible]へ

[illegible]あけのつまくこんく刎まより

[illegible]を月為[illegible]でくの刎まを

[illegible]を惜むべく。又[illegible]

[illegible]なれど[illegible]。[illegible]て並ての一

[illegible]れと毋屑の氣

[illegible]文白を考へ[illegible]へ

無仏月掛を[illegible]

古人のそなへよ。楊ハ書ものべ〳〵ほどゝいへども
らと。金ハのしゝ〳〵ゞ。しんハつゞべうゝとゝひ
しハ宮ゝうゝ。さゝ行ゝゆゝくゝのゝとまち
ゝ。雷ゞう縁ハくいゝそくゝとあゝゝあゝ出くく
ゝとゝゝゝゝ。ぱんゝくゝものようそ
ゝゝものゝんゝゞ。ぱんいひ出ゝゝゝゝゝハあまう
詩のゝくなさゝのゝう。ゆゝてぱんハゝの半。
かあゝゝしハ金出のゝゝゝゝゝゝゝゝゝ大唐な

金ぐんぐゝとゝれハ。大体平生ふゝくゝ和めあゝゝどう
ゝゝゝとあゝよ鏡ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

客ゝ[illegible]ゝ嘉[illegible]じやとあるゝ人あとゝ腰と切て
ある加ちゝとゝ小枝のちゝゝがゝふ長[illegible]仕舞
ゝゝゝ

ぬさうり。その仕方とは、わらでこしらへさきをのく又
ちろりやすきものうり。おぼつかしう和らと
つくりをなく。又糸なとつくる事で
はんさいいつとなく。手仕方といふものい
たえいなつてとうとうもつくとうり。
あらひい暮つてとうり。又離まとをえ
まうり。和もの仕方とものい。仕方とろ
てちふをとろこのうれがそれく
の身分利口と義明かあるべきうり。ひとりを
や色年ふうけろ女中。京ふかなんぎやうな
つくきつとかと俄よ大年ふうけ。又手く
ちろ相ふ稼ふ稼ふをとろ。行結ひ
ふとも孔雀や指方帯でとも。中まの仕方ひく
つくこのうとをあるのなれだ。美さんとあよ
えとねとうとい。余程のぶ義用とのとうべし。
おのく考へよ

文章の古和

文のことゝうい流義ゝゝりさまぐ〻ありて
物なるべい弾らふ義へうゝゝゝど。大際ゝゝく
おゝゝの文体ゝゝのゝゝいうゝゝゝのゝていなし。
ゝ通俗ふうゝゝくゆうぶようんゝゝなり。ゝ用
堂流あるひい七条などの。東西人ゝを状
うゝ。お伊勢ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝりたゝんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゆゝおりひゝゝく。かゝゝれわゝべゝ。ゝ余い
ずゝぶんく紙ゝゝゝゝ。ゝ風体ゝゝゝゝゝゝど
南時稚ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ時代文白いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝい文張。時ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

てもこのいたさふわる。やとり紅の紅花
ろやうでと。おまへさまじやさんじやもも
すれく。門徒年をうつくあげてつかけん。
まくかやうこよつく女郎くに来を吹よ。重なく数
の句や獏をを方なぐ年てきこう。下るふ名年
こうこうよう。どうやこの時代文句をさぐくしう
おくおくをおをまく万こものう。ぎく い生和
おりのウンテレガンまん中きれば。返事も又く

つつつつつ高欄などつまてゆうべく。すべくく
女郎へ来を吹よ。時代文句や。号徒借なぐ
くく来をおあおくぶ。すつぶんと大年又付合
ておくべし。かくかおをあんどようれもで
おけいぶくでのふづひひ乃徒い往をつくく八
まるものなり

女郎稼乃 紙年

一彩くりく遠年でなくこのあくまつ年

あるべし。されど場合あしくこのいそがはしき
江戸すぐに一年半くらいつゝのうちにやゝ
生るべし。あしくぞ成て居ることのうり

一すべて生ものは陽和。あるに冬年あるべし。
あるべくして生るゞ秘事とあるべし

一同じ第屋にて家人とも居ることあまたあるべ
き飛ぶ人これ呑也しておくべしし而は
なつかしき人兵の分れ居ることあるべ

ゆうふすることのよし。生代ふ場合とんくちよ
つとを書さしあるべきなり

一別儀のうちに居ふ弱来いたのひとと。金銀の
むしんをいつまなるも

一ふうう別儀ざあるよ。かゝの兵ふいつとも物
をこのむべうぞ

一いつくうでを者のようう物を費ふうう。早速
第屋くちうへ亟べし

一 別法のあへ物を状を入る事書つぐべくもの
一 あらかじめ状をうつう弟やる事書べくの
ものぞ
一 返事あらかじめ入れ袋とじぐちぐきん
一 袋や。つゝの中ハ大切のものを入るべくもの
一 つゝぬおやまをそなへ事なれ
一 今変ハ女帝をおそれ事うゝ
一 事よりさゝ迄ものを敬ちいさゝものうれ

一 巴男とぐちやく〳〵 騒〳〵 仕ぐつ。若よりの事
あさふあ〳〵
一 つ座のゝものを汲者のけう〳〵なる事うれ
一 ゑ水よりく。ゝのあゝわいうゝを呼く
あゝゝを
一 あのゝものや差ものハ下夢ハゝもゞ〳〵。紙
つやそのかう形結のものふゝをゝぐべくもの
一 あより先く森ゝなゝ

一あるりさるく庶子年うれ
一たとへあい仕宜ふりあつくしるとたゝ弟や
い矢法れをいつくく庶子ごつ
一記後いうとと不墨感いまづうごとする名のやく
そくいするを。志ゆるやそくいすうれ
一指論その介人名和新こわの級い作ると男の
役あひいひくく紋などけ子年あく
一いり紅粹なあごと。よ嬬るのとさへやりそう

そりがとろ〳〵さまり
一森弓うゝを揚てそどべ〳〵
一かくくどい弱して垂べうど
一森弓ふあがそめをそれて ゆくいうそく系
屋あづま垂べし
けかいうくあべ〳〵そこ清様変ふそれく
考へあべ〳〵ゆづつの半よりもひうごるこびひ
あうとのうり

名の秋

あふうのあるとまんばらとあるもの
うらうらはうをでまきうらうるれ
ちんちろりよ手振しくらうあるべ
くくいやでと大せりよせよ
名年をうれいのうけの楽くと
おりくうるうさ湖よはまるぞ

分いのうちとのぐれど
はおうは鬼うの分をもるなり
妹を引て出かとを世間まるり
あるがすれば人がみくむぞ
出すぎたさお山まいはうあるの
くくは生てを人が形ケ沢
おうの石うり書なんしてをどくうう
出すたぬくるの人があひする

ちんぢやうしたる人うけとり
あるのめぐりをもりむこまれる
まつとあるほうに男うまんじつの
ぶつ人あつまると板のとげぬとの
よのなか
世中いたつてぶつうつてをうんぢくと
ありへで暮むまつの笠をなし
くれ方へすつるつるじやとありつるよ
こゝろおのづから むこうの世中

ゆつてある人いおやまふまつのもの
うりに来るの笠屋きりの
ろ人をひろりのふてぢをなし
あるぢ風あてあてのぢ
まつのまつをつもまぢ
きやくことやつをこのうり
いやつつうつるうるまんぢうの
まをのうるうりまりくま

神ほうけいのまどをなさせん
まづ第ふつくのうけをばきり
一命ふまるをはらせべそふをさえ
やがて第らうけもぞさるそのぞ
たのりこんを生涯をひとけく
未のさうえをとせの女郎舞
太のうとあと聖婢なるをいとど新婚の年
ふ面ゆみうんがあまを

待人乃来る歌

わっせとが来ぶさとひなりさぶの
くとのふるまひかるて走をを
けをを二だんうえ一人る玉つまの年
をいりまぶ

玉人を美ふ万年
いとせるくまひうさえはやく玉の

よるの夜をかへしてぞ物おもふ
あまい夜の夢のうちに恋をえしもあかく
ふるうまつ　あらし　枕のうをこだん
人をまつ　人ふる　なく　森へだし　かるどそ
人を夢　よ　ん　ふ　ま　う

嬉　あ　を　一限　よ　す　る　兄
むし　ふ　の　ま　ぐ　く　ふ　ま　ぐ　る　山　乃　井　の

あてをんるわるをめるう郭

岩　ま　ま　の　ま　ま　れ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
な　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
出　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
花御風流　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

逸身文庫持